

生後3週間で預かった女の子。8歳で養子縁組をした。小3で真実告知。「えーっ」という感じだったが、姉たちと姓が違うので、何となく分かっていたようだ。「そうだったんだ」と。友だちの多い、面白い子。里母は上の3人とほどこかつながりの感覚が薄い、4番目は育てていて、何か返ってくるものがある感じがする。

この子は成績は下から数えたほうが早い、信頼できる子。社会に出しても心配ないと思う。父親はいなくて、実母は高校生だったので面倒が見られなかった。実母とは、委託された時に会っただけで、それ以後連絡もない。この子は本当に小さいときから育てた（生後3週間）ので、上の3人には申し訳ないが、子どもに対する気持が違う。本人も里母に寄り添ってくれる。ほっとする何かが親子の間にあるように思う。（以上）

## 205 「おばちゃんの子に生まれて、やり直していい？」

一虐待のトラウマから、しばらく「ほか弁」を食べなかった子

### (1) 概要：

Aはネグレクトと虐待を経験してきた子で、「おばちゃんの子どもに生まれて、やり直していい？」と聞いてから、赤ちゃんがえりをした子であった。里母は、ある親業のプログラムのトレーナーをしている。

ポイント：賢くて養育が楽な子は、施設側も手離したがるのか

### (2) 家族構成：

5人家族。里父は60代で、宗教（天理教会）関係の団体を主宰している。里母（専業主婦）も60代。里子（A：15歳、A2：14歳、A3：11歳 A2とA3はきょうだい）実子はいない。Aちゃんとは、1月31日に養子縁組済み。大震災で木造の築80年の住まいが崩壊、現地域に移り、行政が20万円の補助をしてくれて、建物を新築し、里親登録した。信者も協力してくれた。

### (3) Aちゃん（15歳、中3男子）について

#### ①施設が手離したがる子だった。

実母が家出し、実父はAが2.3歳頃からほか弁を1つ与えて、仕事に出かけていたという。実父の彼女がAが3歳の時に一緒に暮らし始めるが、彼女も仕事を持ち、ほか弁が続いた。一時、実父の友人宅に預けられたが、年上の子がいていじめられ、トイレで泣いて我慢したと言う。

4/1～5/7 迄養護施設にいて、5/7に里家に来た。実父とAちゃんと子どもセンターで始めて面会した時から、Aちゃんをずっと知っていた子のような感じがした。実父も里親委託を望み、すぐ長期委託を希望したが、養護施設がうんと言わない。施設側も、養育が楽な子は手離したがると思われる。里親担当が里母とAちゃんの様子を見て、「私が叱られればいいことですから」と、委託に尽力してくれて、5月7日にやっと里家に来ることができた。

②来て1ヶ月位して、赤ちゃんがえりしたが「おぼちゃんの子に生まれて、やり直しをしていい？」と言い出して、赤ちゃんがえりが始まった。「いい」と言ったら、トイレまで付いてくる。ハグしてあげると、おっぱいを探ってくる。「おっぱい吸っていい？」と言い、1度吸わせた。何か月もハグしてあげる。入浴は夫とさせるが、そのあと、時々風呂上がりに、物置きに寝巻を着て籠っていた。何回目かに引きずり出して布団の上に放り投げた。その時から、赤ちゃんがえりが止まった。今思うともっととことん付きあってやればよかったのだが、勉強不足だった。赤ちゃんがえりの不足が、思春期になって出るのではないかと心配している。

③育てやすい子で、遅れも障害もない。健康面は、少し便秘がちで、近視ぐらい。

④学校と成績：

とてもいい成績、得意なのは数学と理科で、苦手は国語と社会。

学校へ行くのは大好きで、勉強はくとても>好き。宿題は言われなくとも大体する。友だち関係もとてもいい。

⑤親子関係：

とても気があっている。遠慮せず叱っている。

⑥悩みの相談相手：

児相、里親会の仲間、施設の里親担当

⑦虐待の影：

ほか弁のトラウマから、里家で、当初おいしそうなほか弁を与えても、押し黙ったまま食べなかった。気がついてお皿に並べ替えてやると、やっと食べてくれた。それからは、ずっとそうしている。実父の友人宅に預けられていた時、上の子にいじめられて、トイレで泣いて我慢したというが、里家に来た当時は、ちょっと悲しいことがあっても全く涙を見せず、トイレに1時間位籠っていた。周囲の人にとっても気を使い、いつも我慢していた。<異常なくらい>お利口さんだった。

⑧養育返上は1度も考えたことがない。

実親とは委託後1度も会っていない。実親を初めの頃は「お父さんと〇〇した」と言っていたが、今は顔を思いだせないようである。

⑨その後：

今は中3だが、4年生ぐらいから、こちらが言ったわけではないのに、「お父さん（里父）の仕事を継ぎたい」と言い出している。

(4) その他の里子：

○A2（当時14歳、中2女子）は、今は自立している。実母が高校生で出産した子。実母も親から虐待を受けていたという。この子には「過去の話をして、もう過去には戻らないから、将来に向かって行こうね」「お母さんは、あなたを叩くことしかできなかったのだから」と話している。それまでは、「自分が悪かったから叩かれた。母親は自分を嫌っていたのではないかと」思っていたのではなからうか。

(5) 虐待とネグレクト

何人もの里子を預かって思うのは、虐待された子より、ネグレクトされた子のほうが事

態は深刻である。被虐待児の場合には暴力は一時的のものだし、親はその合間に厳しくしつけもする。しかしネグレクトされた子は、生活の基盤ができていないので、日常生活の上で基本的なことから教えなければならない。

また、被虐待児一般について言えることは、前向きにしようと「褒める」ことをしても、すぐ「どうせ、おれなんか」となってしまうと、心に届くのに時間がかかる。（以上）

#### 5) 「愛着形成」の失敗と専門家による治療支援（4事例）

一次的にせよ、施設への保護による二次的虐待にせよ、子どもたちが発達の早期に、特定の対象（多くは親）との間に愛着関係を形成することに失敗すると、その後の対人関係の形成に深刻な障害が発生することが知られている。施設養育の危険性が有識者や里親を初め、社会的養護にかかわる人々から指摘されているにもかかわらず、わが国の施設委託率の高さは、諸外国の間で際立っている。いつになったら改善への道が開かれるのか。

一旦、愛着障害が形成され、その後に出会う人々との間で愛着形成が難しくなると（愛着不全）、専門家に手によっても、簡単には修復が難しくなる。現在、その修復のプログラムの試みが開発され始めてはいるものの、人の心におきた傷痕は根が深く、改善が難しい。しかし、それでもそうしたプログラムの研究開発が喫緊の課題であり、またそのプログラムが多くの機関で実施されることが、必要である。

なお、この種の心理療法的プログラムには、カウンセリング、遊戯療法（ポストトラウマティックプレイを含む）、箱庭療法、認知行動療法（暴露療法を含む）、ソーシャルスキル・トレーニング、セカンド・ステップ、家族療法、コモンセンス・ペアレンティング、その他がある。（増沢高「虐待を受けた子どもの回復と育ちを考える」より）

事例 301 は、虐待防止センターのプログラムに 15 回も里子と通い、親子にとって有意義だったと述べている。ただし、これは遠方のセンターに親子 2 人が 15 回も通い続けた。双方で共有した往復の時間の密度も効果をもたらした 1 因かもしれないが。

事例 305 は、養育上に困難な事態が生じて里子が一時保護され、児相から「愛着形成プログラムの受講」の条件がついて委託が再開された例である。こうしたプログラムはまだ試行段階であり、児相のアセスメントは適切だったかどうか。いずれにせよ里親が育児上の困難に出会った際のサポート体制上の問題を考えさせられる事例である。

また事例 308 に見るように、愛着不全は必ずしも、虐待の結果ばかりでなく、心に深刻な痛手を受けた場合にも発生する。それをそのままにせず、里子が社会に送り出された時に支障がないように、治療が必要である。いずれにせよこうした心理的な問題への治療の研究と方法の開発、また受診機関がポストの設置されることが望まれる。

また事例 107（収録否）は、真実告知をして、その時は聞かないふりをしていたが、その後 2、3 か月間、抜毛の癖が止まらなかった女の子の事例で、2 人の母を持つと言う事態にどう心の手当てをしてやればいいのか、専門家による支援の必要性を感じる事例であった。

### 308 大人に心を開かず、2年経っても里親に敬語を使う里子に気の重い里母の日々 —トラウマを持つ子には、愛を注ぐだけでなく専門家の治療も必要ではないか

#### (1) 概要

死亡した実母とのかかわりに悔いがあるのか、里母や里家の家族に全く心を開かず、2年経っても敬語で話す里子に心が弾まず、気の重い日々を過ごしている里母。仲間の間ではムードメーカーだと聞かすが、大人との関係が作れない子である。

ポイント：実母との関係の中でトラウマから解放されず、大人に心を開こうとしない里子には、この先の人生を考えると、専門家による心の治療が必要ではないだろうか。

#### (2) 家族構成：

4人家族。里母は60代で、フルタイムで働きながら（定刻勤務の部署に移ってから）里子を養育してきたが、2年前から専業主婦。里父は60代で自営。実子あり。

里子は18歳（A2）と17歳（A）で、Aのほうが先に委託された。

委託歴は、1年以上が9人、短期が5人。

#### (3) Aちゃん：17歳高2男子、15歳から2年2か月養育。

##### ①委託理由：

高校進学を希望していたが、中学の成績実績がない（施設にいたため）、中学編入の必要があり、入試まで措置変更の必要があつて協力を要請された。

日々の世話はそれほどでないが、心を開ざしたままの子で、未だに打ち解けず、敬語を使う。大変ではないが、育て難い子。里子との心の通い合いもなく、気が重い毎日。支援機関の人との面接でAは「家の居心地はいい。不自由はない。ただ、里父母に好かれていないのでは」と言ったそうである。

##### ②Aちゃんの家族：

母子家庭で、母子関係がうまくいかず、そのため施設入所。その後母は死亡。そのせいか、大人とのかかわりを避けるAちゃんだった。

##### ③親子関係

里母からの忠告や注意に反抗的で、気持の交流ができず、疲れる。委託解除したい気持ちも、1.2度あった。

##### ④身体状況：

特に問題はない

##### ⑤性格：

くどても他人に警戒心が強い、くわりと人に心を開かず、素直でない、人見知りが強い、く少しく暗い、小心、無気力、劣等感が強い、反省心がない。

##### ⑥学校と成績：

成績は中の上で、文系が得意、数学が苦手。勉強は普通に好きで、宿題は自分からやる。学校はやや好き、友だち関係は普通。施設では十分な勉強ができなかったが、しかし高校進

学の希望は自分の意思だと言う。

⑦家族との交流：

お祖父さんと1度面会したが、それ以来絶縁。部屋には母親の写真を飾っている。(児相の担当者のお話によると、母親とうまくいかず、暴力をふるって警察沙汰になり、施設入所。その時のことを自分でも悪かったと言っていたそうである)

⑧今ある問題：

家庭の体験のない子。里母と2年以上一緒にいても、いまだに敬語で話す。人との距離感が分からない子。里父母も施設の先生と同じ人だと思っているのだろうか。一緒に食事をし、テレビを見ても、黙々と食べるだけ。心が弾まない。つまらない。育て甲斐がない。

クラスでは、ムードメーカーと言われているとか。大人との関係が作れず、同世代の中では居場所があるのだろう。

⑨親子関係：

気持ちが通じ合わない、できるだけ叱らないようにしている。

⑩相談相手：

里親会の仲間、児相の里親担当、里親支援機関(NPO)など。

(4) その他の里子：

A2 18歳(高3)男子。実家では、継母に心理的に虐待され、日中の同居は拒否されて外で過ごしていたようである。実父は厳格な性格、本人に厳しく接していたそうである。人とのかかわりが少なく、済む職場に就職が決まった。

A2は、里母にお母さんと言う。

(5) その他：

<里母のコメント>

①里母は、子どもの親になろうとするのを目的とせず、役割(仕事)としての里母になること。また、そうした里母を支援する機関が必要ではないか。

②思春期の里子の支援を専門にする機関(場)が必要であり、里親の家を出たあとの子どもに、シェアハウス等の生活の場所を提供する場の経営が必要ではないか。他県にはそうした場を里親が運営していると聞く。(以上)

### 305 愛着形成プログラムを受けてほしいと児相から言われた里母 —養育上種々のトラブルがあって

1) 概要：

生後すぐから乳児院、そして養護施設で生活していた4歳の里子は、委託すぐから退行が激しく、3カ月後に里子との関係が限界に達したと感じた里親は、ケースワーカーに相談。里子は一時保護され、1か月後に里子の「帰りたい」との強い希望で里家に再委託された。その間の児相側の対応は、里親には納得のできないものであった。

ポイント：里親と児相間で「里子の最善の利益」をめぐる意見の対立が生じた際に、措置権をもつのは児相であって、里親側の権利（意見）を擁護する機関がないという問題がある。

2) 家族構成：

3人家族。里母 40代（週2日勤務）、里父 40代 勤務者、Aちゃん 5歳、 実子なし

3) 里親になった動機：

実子がなかった。周囲に大きな反対はなかった。

4) Aちゃんについて：

5歳男子（幼稚園生）、4歳から1年間養育。育児放棄か、生まれた時からの乳児院・施設育ちで、交流期間は2か月。児童養護施設での初対面の時から、関係づくりは順調に進んでいるように感じていた。しかし、里親の家に外出する段階になると、施設を出たら帰れなくなると思っていたのか、「行きたくない」と施設の玄関で激しくだだをこねるなど、予想外の反応がみられるようになって、予定通りに進まなくなった。最終的には、2か月の交流期間は面会を中心に行って、里親宅への外出・外泊は1回ずつで委託された。

赤ちゃん返りは、委託当初からみられたが、現在もとても大きい。いつも里親に甘え、時々赤ちゃんのような言葉づかいをする。すぐ里母の膝に乗りたがる。特定の養育者をもたないので、愛着形成ができていないようだ。社会の常識に対して、軸となる物差しをもたない。大人の顔色を見て、自分の考えを変えてしまう。

① 身体発達：

発達状態はよく、頭のいい子だとは思（ひらがな、カタカナは読める。簡単な日記を書く）おねしょがある

② 性格：

とても甘えたがる。約束を守らない。わりとわがままで、落ち着きがない。自分の気持ちを素直に表現できないことがある。臆病。感情に起伏がある。言葉や物の扱い方が乱暴なことがある。劣等感がある。思い通りにならないと暴力をふるうことがある。

③ 心配していること

1.自分がやりたいこと、好きなこと以外はやろうとしない。

2.都合の悪いことは、聞かなかつたり忘れて、記憶から切り離してしまう。かっとして泣くこともあるが、その後けろっとしてしまう。それで同じことの繰り返しになる。去年、3か月間はとくにひどくて、ケースワーカーに相談した。

3.他人との距離のとり方や、折り合いをつけることがうまくできないので、やりすぎや、一方的過ぎる言動で、他人や集団にうまく適応できないことがある。しかし、最近ではいずれも改善傾向にある。

④親子関係：

その都度遠慮せずに叱っている。

（里）親子関係は、年月を重ねる事で、お互いの理解や信頼関係は少しずつ深まっている

と感じている。今思えば委託当初の親子関係は、うまくいってはいたが、見せかけだけのものだったように思う。

#### 5) Aちゃんのその後：

Aちゃんは、里家に来てからは、面会当時の不具合からは想像でないほど適応がスムーズで、2 か月ほどは、とてもいい子という印象だった。しかしその後、何か注意するとすぐにあやまるが、その直後から同じ事を繰り返す、気に入らない事があると激しく癩癩をおこす、自分に都合の悪いことはきかないふりをしたり、都合のよいように言い訳したり演出したりする、里親が見ていないところではいけないことをする、などの問題行動が増えてきて、里親は次第に不愉快に感じるようになった。

児相のケースワーカーにも相談して、種々努力してみたが、里家に来てから3か月後には、里子との不調和が限界に達したように感じた。

#### 6) 児相への不信感

再度ケースワーカーに相談すると、レスパイトを提案されて、そうすることにした。しかし実際の措置は一時保護で、里子は別の里親に緊急委託された。

ケースワーカーからは「(里親の) 気持ちが変わったら、いつでも(里子を里家に) 戻せますから」と言われていたので、1週間後に委託の再開を希望したら、レスパイトではなく一時保護だったこと。委託再開のためには、里親と児相の関係職員との会議のあと、児相内会議での許可が必要である事を初めて説明された。周囲の人から里子が帰りたがっている事を聞き、ケースワーカーに少しでも早く会議を開いてほしいとお願いしたが、児相の職員はみな多忙のため、そうすぐには調整できないと言われ、そのまま何の連絡もないまま2週間以上待たされた。

やっと設定された会議では、それまで児相職員に相談してきた内容のあげあしをとられ、里親側が一方的に責められる感じで終わる。同様の会議が2回あり、再委託のための児相からの提案を受ける事を条件に、保護から1ヶ月以上経過して、3つの条件を満たすことにして、やっと再委託となった。

- 1.里親対象の「愛着形成プログラム」を(もしプログラムに対する市の定員に空きがあったら)受講すること。
- 2.里親・里子が、それぞれに月1回、児相で心理士と面談すること。
- 3.児相から、幼稚園に里子の様子を聞き合わせる。

7) 一時保護期間中、里子・里親双方に、職員からの説明や支援は殆どなかった。里子も「すぐに(里親宅に) 帰れるから」と言われただけで、何の説明もないまま、2軒の里親の家をたらい回しにされていたようだ。Aちゃんは、いつもの里親の家に帰れるのか、本当に帰れるのか、と不安に思っていたと言う。

Aちゃんは、1年経った今でも児相への不信感が強いのか、「児相に行くと里親の家に帰れなくなるかもしれない」と言って、月1回の児相面接に行きたがらない。時には激しく拒否するので、面談をキャンセルすることがある。

8) 養育返上を1、2度思った。

一時保護の時に、児相の職員から不本意な対応をされたり、納得のいかない非難をされたりしたとき、こんな思いまでして里親をしたくないと思った。

返上しなかったのは、里子が、私たちの下に戻りたいと主張しつづけたから。

もし里子が戻りたいと言わなかったり、私達を拒否するような言動をとっていたら養育を返上していたかもしれません

9) 相談相手：

夫>自分の友人>里親会の仲間の順。

一時保護前に、児相から勧められて、精神科医による里親のカウンセリングを一度受けたが、教科書通りの提案ばかりで、殆ど役に立たなかった。委託当初は「里親担当」を頼りにしていたが、一時保護の時の対応を機に頼りにしなくなった。

10) 実親との交流：

1度もない。実親のことを口にしたのは、数か月前に1度 「僕を生んでくれた人」と言ったことがある。

11) その他：

今回、里親として体験したことは、スタンダードともいえる里親・里子間の不調和だったのではないと思う。里親も里子も特別な者だったとは思わない。それに対して、里親支援の専門機関である児相から、何の有効な支援も得ることができず、まるで特殊なケースであるかのように対応されて、里親も里子も、児相に対しての不信感しか持てなくなってしまったのが現状。里親を支援するには、あまりに不十分な知識と経験しか持たない「専門集団」でありながら、里親・里子に関する絶対的権限を持っているので、里親は、児相の方針・決定に従わざるを得ない。里親は、そうした不条理な立場におかれながら、率直に不満を訴える場も持たず、一度委託されてしまえば、自分の気持ちだけで委託解除する事もできない。なぜなら、例え里親側に委託解除するに足る正当な理由があったとしても、情のわいた里子に「この家にいたい」と泣かれれば、おいそれと委託解除するとは言えないからである。(以上)

### 301 15回の愛着修復プログラムに通って、親にも子にもよかったと言う里母

—長い施設での暮らしで残る行動上のダメージ修復のために

(1) 概要：Aは種々問題のある子で、里母は「子ども虐待防止センター」に通って、15回の「愛着修復プログラム」を受けた。親にも子にもよかったと言う。

ポイント：シフト制の保育者の養育システムが子どもに与える問題点を指摘



(2) 家族構成：

4人家族。里母は40代（主婦）、里父は50代勤務者。里子は10歳（A）と3歳（A2）  
実子なし

(3) 里親になった動機：

子どもがいなくて、子育てしたかった。

(4) 養育歴：

長期2人（AとA2）、短期3人（うち1人は季節里親で、定期的に預かっている）

(5) Aちゃんについて：

10歳男子（小4）5歳から5年間養育。普通養子縁組を希望している。

5歳までは、乳児院から児童養護施設にいた。実母はDVの被害者で、精神障害。育てられずに、赤ん坊は乳児院に保護された。

それまでAに里親を探すために交流があったが、2回不調の後で、5歳で里家に委託された。里子との交流で何度も会い外出もしたが、施設側から子どもに、肝心なこと（里家に来ること）の説明がなかった。施設から当時通っていた幼稚園にも、里親宅に来る直前に知らせたという。本人も、幼稚園をやめる2日前に突然、里家に来ることを知らされて、ショックを受けていた。

委託前に里親との交流期間が長いと、リスクもでてくる。1対1の関係（愛着関係）を築く時期が遅れて行く。小さい子は1対1の関係がもてる家庭環境が大事だと思うが、乳児院で丁寧に世話をしても、24時間、担当が子どもを世話するわけではない。職員はシフト制で、夜に来たり、朝に来たりする。子どもの目から見れば、「都合のよい時だけ来る人」に見える気がする。

①心身発達：

受託当初は、聞いていた「どか食い」もなかったし、試し行動や赤ちゃんがえりも大したことは無かったと言う意味では、手ごたえがない子だったが、自転車の後ろに乗せようとすると、大泣きした。

障害はないが情緒面で遅れている感じがする。＜わりと＞低身長、偏食、小食。甘えたがる、素直でない、暗い、感情の起伏が激しい、無気力、心を閉ざす、劣等感があり、警戒心が強い。

②愛着修復プログラム：

明大前にある「子ども虐待防止センター」で15回のプログラムを希望して受けた。1時間ほどで、3人のセラピストがかかわるプログラムを受けて、里子も里親もずいぶん変化したと思う。

③学校と学習：

幼稚園年中組から、小学校へ入学。勉強についていけない。先生の指示が入らない。施設時代に1対多数（先生と生徒）のコミュニケーションに慣れていたので、自分のことだと思えず、聞き流す習慣が身についていたためだろう。クラスで問題を起こすわけではなく、放

っておかれ易いタイプ。

成績は中の下、得意なのは理科、苦手は算数。勉強はやや嫌い。学校はとても好きで、友だち関係はとてもいい。

④問題：

過去のことは忘れてしまう子。本人も、4年生になって「過ぎたことは忘れることにしている」と言う。叱っても、黙っている。忘れて行く。身の処し方だろうか。泣く時はあるが、ただの駄々をこねる「ぎゃあ」という泣き方ではなく、委託当初は相手を責めるような泣き方をした。「私はこんなひどい目に会っています！」のような。

親しい先生が作れない。乳児院時代は手を焼かせない子だったので、みんなに可愛がられたというが、その意味は、2年間に4人も担当が替わっても、担当を替えやすい子だからだろう。愛着形成ができなかったと思われる。

⑤心配していること：

勉強が遅れ気味、段取りができない。しかし仕事ができなくとも、人にとっては人間関係を築いていけるかどうか的大事なので、友だち関係に気をつけている。

⑥親子関係：

とても気があっている。遠慮せず叱っている。

⑦相談相手：

あらゆる相談機関を利用したが、しかし里親会の仲間が一番。

(6) A2について：

現在3歳、8か月で里家に来た。実母は生活保護を受けている。委託当初は無表情で、主張しない、意思表示もしない、誰にもニコニコしている子だった。誰もがちやほやしてくれるとは限らないことが、だんだん分かってきて、誰にでもニコニコすることはなくなった。

市内の乳児院に空きがなくて、市外の乳児院に入ったが、実母は里親委託を希望していて、A2を委託された。

実親との交流、1度もない。実親のことを口にしたのは、数か月前に1度「僕を生んでくれた人」と言ったことがある。(以上)

## 6) とりわけ難しい問題を持った子と18歳以後の支援(3事例)

里親に預けられる子どもの多くは、種々の理由から心に傷を負っていたり、愛着形成ができていなかったり、不適切な行動様式を身につけている。その点については、23年度の本報告書にも記した通りである。そうした子どもたちに対しては、専門家と言われる人々も、治療や教育に困難な場合が少なくない。また時間を要する。それは養育といわれる範疇を超えて、「療育」(治療と教育)と呼ばれるべきジャンルの特殊な養育とみなすべきであろう。本報告書の最後で考察するように、そうした養育困難な事例を、専門家でない、言わば素人の里親に委ねようとするのは、専門機関として責任の回避ではなかろうか。

すでに全国調査の結果の補足(p28)に記したように、平成22年11月の時点で、

里子の措置解除・変更のうち25%前後は「里親・里子不調」によるものとの数字もある。それらの多くは、里子養育に熱意はあっても「療育」の専門家でない里親に、子どもを委託した不手際（アセスメントの失敗）からとも考えられる。

養育返上をした事例は、今回、全国調査からも面接調査でも部分的にしか扱っていないが、以下の4事例は、里親の手にあまる子どもを委託された事例と、18歳以後の生活支援が不十分なため、一旦果たされたかに思えた自立がとん挫した事例である。

事例202の第1子は非行深度が深くて養育を返上した事例である。

事例206は、重複障害をもつ子の事例である。比較的ゆとりのあるライフスタイルもっている里親が、施設でも引き取り手がなく、実親はいても家にも帰れない重複障害の里子を養育している事例である。

事例303は不登校である。不登校は現代の子どもたちにしばしば発生するが、不登校が姉妹に発生したことで、里親は一時自信喪失に陥っている。今後、サポート校での学業が続くかどうかとも危ぶまれる。初期に適切なサポートが必要だったケースであろう。

事例302は、18歳以後自立支援ホームに入居して定職をもったが、生活上の支援が不十分で仕事をやめ、現在は作業所にいる事例である。

## 202 非行深度の深い16歳の里子を預かって養育し切れず、養育返上した里親 —実子の希望で、次からは小さい子を預かった

### (1) 概要：

Aちゃんはどちらかと言えば育てやすいが、能力にバラツキがある様子に里母は苦勞している。2歳で委託され、里母が仕事をもっていたので、保育園に入れ、現在は小学1年生。

ポイント：扱いの難しい子（一人目の里子）を里家に委託することへの疑問を示す事例。

### (2) 家族構成：

里父は40代自営、里母40代自営。5人家族。実子は20代、10代、Aちゃんは小1男子。2歳で委託され、4年間養育。里家に来た時は「あー」しか言わなかった。里母も仕事を持っていたので、すぐ保育園を探した。

Aちゃんを委託される前には、16歳の女子（実親から施設に保護された子）の里子を預かっていて、家出、タバコ、夜中の家の抜け出しなど非常に大変で、やがて障害事件を起こし、実子の受験期等も重なって、半年で養育返上。実子が「もう大きな子は預ってほしくない。小さい子ならOKやけど」と言った。Aちゃんは初めから（児相からの申し出による）特別養子縁組対象の子で、法的にも本人を護ってほしいと言われた。多少迷ったが、家族で相談して受け入れた。平成25年度中に養子縁組予定。

### (3) 委託の理由：

17歳の実母から生まれ、養育能力がないので、産院から乳児院に。

#### (4) Aちゃんについて

里家に慣れなくて、夜はなかなか寝てくれなかった。寝る場所が決まらず、ずっとごろごろしていた。里父と入浴するのは大泣きだった。実子の子育てが一段落してからの2歳児の生活リズムに、里母の体力もついていけなくて、仕事もあり、養育に慣れるのは大変だった。

##### ①能力のアンバランス：

どちらかと言えば育てやすい方か。児相からは、小学1年生になってから、「発達の遅れではないが、聞く力が3歳位」と聞いた。時間割をして、宿題をしておいても、朝、学校に行くと宿題の提出ができないことがある。里母に精神的余裕がある時はいいが、余裕がない時には、学校から電話があったり、こちらの言うことをなかなか理解してくれないと、落ちこんでしまう。しかし、それ以外は頭の回転が速い方である。

##### ②身体状況：

わりと運動神経が鈍い。少し小さくて、やせ過ぎ。偏食、小食。

③性格；<すこし>落ち着きがなく、甘えたがる。反省心はあり、暴力は振るわないし、パニックも起こさない。他人に警戒心も強くない。しかし、3つ言われても1つしか耳に入らないで、1つひとつ抜けて行く。

④学校と成績：成績は中の下。得意なのは、算数の計算で、苦手は音楽。勉強はやや好きで、学校へ行くのはとても好き。宿題は言われなくとも大体する。愛嬌のある子で、この頃は友だちの家にも行くようになってきた。

##### ⑤心配ごと：

友だちの名前が中々覚えられない。先生の呼びかけが耳に入らない。

学校へ行っても、ランドセルが片付けられずに遊んでいる。読み書きが苦手。

提出物が出せない。先生にふざけることが多い。勉強の理解が遅いので、宿題が中々進まない。他にもいろいろ。

##### ⑥親子関係；

とても気があっている。遠慮せずに叱る。養育返上は1度も思ったことがない。Aちゃんは「産んでくれたママに会わせてね」と何回か言ったことがある。自分に今と違う姓があることは知っている。

##### ⑦相談相手：

里親会の仲間、担任、児相の職員、夫の友人、施設の職員、NPOなど。

#### (5) その他：

##### <里子手当について>

地域によって違いがあると思うが、一般論として、現在の食費、教育費は不足だと思う。里親がよほど経済的にゆとりがないとやっていけない。例えば、里子が小学生なら、塾やお稽古ごとに通わせるのが普通になっているが、その費用は里親負担である。そうした費用がかさんでくると、里母はつい里子に言葉がきつくなってくるとの声も聞く。小学校でも制服のある学校もある。また、学習机や服などもお下がりのある家ならいいが、初めて預かる家では、それらを全部まかなうことになり、現在の3万円では到底不足である。事情に応じた行政の補助が必要ではないか。(以上)

## 206 重複障害を持つ里子は、施設も預かりたがらない？

### 一中卒後、行くところがない子を引き受けた里親

#### 1) 概要：

複雑な家庭環境をもつ知的障害（重複障害）の高2の里子は、施設も受け入れず、中卒後行くところがないからと児相に頼まれて、預かることにした。1度里父に叱られて家出したが、結局里家に戻って来た。長期休みには実家に帰っている。

ポイント：障害が重度の子は、原則として、里親ではなく専門機関が受け入れるべきではないかと思われる事例。

#### 2) 家族構成：

4人家族。里母は50代で以前は保育士（7年前に退職）、里父は60代で4年前に退職した。援農で水田6反歩を耕作。里子に種々の農業体験や野外体験をさせることができる。18歳A（高2男子）を15歳から2年3カ月養育。他にはA2（14歳：中3）の里子がいる。実子は3人（33歳、31歳、29歳、すでに大学を出て自立している）。

近所に昨年11月、新しく家を建て、もとの家は祖母と次男夫婦が、新築の家は里親夫婦とAちゃんとA2（中3）が住んでいる。

#### 3) 里親になった動機：

実子（下の子）が小学生の頃、一緒に大きくなってくればいいと、里親の申し込みをした。里父は現職中に福祉に携わることがあり、何か社会貢献ができないかと考えていた。当時県では社会的養護のキャンペーン（第2期）をしており、季節里親などを何人もした。Aは、子ども家庭センターから中卒後行くところがない子がいるからと頼まれて、長期委託4人目の里子となった。

#### 4) Aちゃん（高2男子）について：

特別支援学校高等部に在籍。軽度知的障害（療育手帳B2）で、統合失調症で通院中。

実母は精神を病み、父親は車椅子生活。10人兄弟の5番目。Aの兄弟にも知的障害の子が何人かいる様子。Aちゃんは2歳から養護施設で育つが詳細は不明。6年生で性的いたずらをして、〇〇学園に。そこでまた中2の子にいたずらをして××学園に。15歳で実親の許に返された」が、姉や実母と折り合いが悪く、精神科の病院に入院したが、長期入院はよくないし、施設も受け入れないので、里親が受け入れることになった。

現在は特別支援学校高等部において、サッカー部で活躍。卒業後の就労に向けて、スーパーやクリーニング店などで、実習を重ねている。

①委託後3カ月まで、とにかくよくしゃべる子で、阪神タイガース、将棋、卓球、歴史上の人物などについて、一方的にしゃべった。自己中心的で、他人の意見や思いやりなど感じることができなくて、人の話の中に割り込んでいたが、最近は、少しは相手に合わせることもできるようになってきた。

②身体状況：

<わりと>おなかをこわす、食べ過ぎる。

③性格：

<わりと>感情の起伏が激しい。<少し>落ちつきがない、嘘をつく、反省心がない

最近はずいぶん改善されてきて、指示されたことは最後まで丁寧にできるようになってきた。

④学校状況：

学校（特別支援学校）へ行くのは<とても>好き、友だち関係は<とても>いい。

⑤親子関係：

わりと気があっている。遠慮せずに叱っている。家に帰りたくないと言った時、措置解除も仕方がないかと思っただが、結局戻って来た。

⑥相談相手：

里親会の仲間、児相の里親担当、夫。カウンセリングを子も親も何度か受けた。（定期的に、子ども家庭センターから担当者と心理のスタッフが来て、面接がある）

⑦その他：

委託されて1年位の時、里父に何かできつく叱られ、学校に行ってから家に帰りたくないと言った。その日は学校に泊まり、子ども家庭センターの人に迎えに来てもらって、委託前に入院していた病院に緊急入院し、3週間入院。家に帰りたくないと言っていたので仕方ないと思っていたが、結局は里家に戻って来た。その後、日々問題をクリアしながら、成長を遂げ、現在は安定した生活を送っている。

⑧実親との交流：

定期的に行っている。長期休みには実家に帰る。実親やきょうだいたちは大好きで、嬉しそうに話題にする。将来は、1人暮らしは難しそうなのでグループホームに入れればいいが。

4) Aちゃん以外の里子：

○Aの上の（元）里子

自立して、収入は月13万（正規採用）で、アパートを借りて独り住まいをしていたが、12月にやめてしまった。その後再就職した。人間関係が難しいようだ。（以上）

○A2について

平成24年11月に委託された中3男子。中2の頃に実母に虐待されて、家を飛び出し、児相養護施設に入所。中3の夏、施設内で性的な問題を起こし、一時保護所に。里家に来てから5か月、家族がどんなものか理解できていなくて、また里家になじめず、注意すると、「他人やろ」「この家出て行く」「虐待や」と口走るなど、自分の置かれている立場が分かっていない。このような中で、高校を受験し、4月から私立高校に通うことになっているが、A2と里親共々、2月時点の現在、不安な毎日を送っている。（以上）

### 303 不登校の里子姉妹の1人はサポート校に転校、1人は養育を返上した —実父の許に戻る日を念頭に置きながら養育している自営業の里親

#### (1) 概要：

父親が病気の姉妹を同時に預かったが、時間を置いて2人とも不登校。姉はクラスのグループに入れなくて不登校。妹も後に不登校で他の里家に移り、措置解除。姉は現在サポート校に入学している。アルバイトにはきちんと行っている。

ポイント：いずれ家族再統合（実父の許に戻る）の時が来ることを念頭に置いて、グループホームの父親と交流させている里親

#### (2) 家族構成：

3人家族。自営業（支店もいくつか）の夫婦2人は共に50代、里子は17歳（Aちゃん）。実子は32歳と30歳で家業を手伝う。今までに長期3人、短期4人、1週間の短期10人の里子を預かった。里子には自立を考えて、また実父と早く暮らせるように（家族再統合）と家事一切を教えようとした。しかし児相の担当者は、それを素直に受け取ったのかどうか。

#### (3) 里親になった動機：

夫婦がじじばばになり、何か楽しみを見つけないかと思った。犬や猫を飼う話も出たが、人にかかわりたいと思って、里子を育てることを考えた。里子については、家族は協力的で、予想していたより養育は楽だったが、思春期になってから（不登校など）養育が難しくなった。

#### (4) Aちゃんについて

17才（女子高2年生）で、5年生（11歳）から6年間育てている。

①Aちゃんは父子家庭の子だったが、父親の病気で、妹と1か月一時保護所にいたのを、2人共引き取った。妹は現在中3だが、昨年10月に姉同様不登校になって措置解除。里母への不満から不登校になったのかと児相に相談して、姉も1時保護所へ移した。

不登校の経緯は、女子高でグループに入れなかったことによる。児相に相談して、昨年11月に、一時保護所に移った。妹も同時に1時保護所に移されたが、12月に他の里親宅へ移ったという。

②実父の病気が悪化して、その後2年間入院し、現在実父はグループホームにいる。姉妹で父のホームに会いに行ったり、実父から電話もかかるなど交流もさせていた。

③Aちゃんは結局女子高を退学し、現在はサポート校に入学している。学校はいくつかの学校の案内を見て、自分で現在の高校を決めた。サポート校は週5日制だが、1月には4日しか登校していないので、この先どうなるか。この5月でAちゃんは18歳になる。

登校はしなくても、週2、3日のバイトには、まじめに行く。こづかいは週2千円与えており、バイト料は通帳に入るが、里母が子どもの希望に応じて、2万ほど下ろしてやっている。

#### ④健康問題：

よく風邪をひく、おなかを壊す

⑤性格：

<とても>無気力、約束をやぶる、わりと暗い、<少し>わがまま、甘えたがる、すぐ泣く、素直でない、人みしり、小心、心を閉ざす、劣等感が強い、反省心がない。嘘をつく  
が、結果としてで、本人は嘘のつもりはないようだ。

⑤学校と成績：

成績は中位、得意な教科は英語、苦手は数学。学校も勉強もふつうに好き、友だち関係も普通

⑥親子関係：

時々気持ちが通じないことがある。あまりきつく叱らないようにしている。  
養育返上を何度か思ったが、口に出したことは1度しかない。返上しなかったのは、子どもの笑顔を見て、子どものことを考えて。

⑦相談相手：

里親会の仲間、児相、NPO。不登校になってからはカウンセリングに通う。

⑧実父との交流：

実父とは定期的に会っている。ホームに尋ねて行く。実父はパパと呼ぶが、里親はおじちゃん、おばちゃん。

### 302 一旦ついた定職を離れ、現在授産所でパン作りをしている里子 —18歳以降の里子たちの多様な姿

(1) 概要：不登校のAちゃんは、実母が児相に相談に来て里親に委託となった。実母に偶然外出先で出会って、リストカットを始める。児相からはそのことについての説明がなかったので、里母は自分の養育に自信をなくしかけた。他の里子の一人は一旦定職に就いたが仕事をやめ、現在は授産場でパンづくりをしている。

ポイント：(A2について) 18歳以降にも、なお支援が必要な若者たちの存在。

(2) 家族構成と成人した里子たち：

3人家族。里母、里父共に60代、専門里親。里母は、地域で民謡教室の指導をしている。  
里子1人(15歳)、実子なし

今までに長期(1年以上)5人、短期20人以上を養育した。

中で、とくに長期に養育した子(A2)は、現在30歳(養子縁組済み、女子高卒)、A3は27歳(自立)、Aちゃん15歳(現在同居中)

(3) Aちゃんについて：

女子中学生(15歳)で、支援学級(現在クラスは3名)において、14歳10カ月から9か月間養育中。児相のどうしてもという希望で、1年限定で受け入れた。

自宅には両親(母親には障害あり)と妹弟がいる。母親がAの不登校について児相に相談



に来て、ワーカーが、Aちゃんに生活習慣を身につけさせたいと委託してきた。高校は養護学校の高等部に行かせる予定。自宅からバスで行ける場所にある。

①健康問題はない。

②性格：

<わりと>人に心を閉ざす、<少し>暗く、人みしり、無気力、劣等感があり、警戒心が強い。

③学校と成績：

学校へ行くのは普通だが、勉強は<やや>嫌い。宿題は言われなくても大体する。友人関係はあまりよくない

④心配していること；

友だち作りができないこと

⑤親子関係：

<わりと>気があっている。気持ちが通じ合うのに少し時間がかかった。できるだけ叱らないようにしている。

⑥相談相手：

担任、里親会の仲間、児相（Aのカウンセリングに通った）

Aは年末年始には自宅に帰っている。

⑦養育返上：

1.2度思った。Aのリストカットを見つけた時に、児相が理由を説明してくれなかった。自分たちにAの指導はできないと思った。リストカットは、Aが外出先で実母に会い、それから始まった。理由は不明。

(4) それ以外の里子について

A2（30歳）は、1月から人間関係がうまくいかず、現在休職中。夕食には里家に来て、食事をしていく。

A3（27歳）は、養護学校の高等部を卒業すると18歳なので措置解除となるが、もっと勉強したいと言うので、2年間支援することにした。その後、能力開発センターで技術指導を受け、その後自立支援ホームに入り、スターボックスに就職。1年8か月勤務したが、自立支援ホームでは、帰宅すればカギを開けて入る部屋に一人置かれるなど、生活の支援がされない。朝起きられない日も出てきて、幻覚などが出はじめ、仕事をやめた。里家に助けを求めてきた。2年間心療内科に通う。

措置解除になった今は、何日か授産施設で働き、パン作りも覚えて、土曜日は「〇〇工房」（パン工場、ショップも併設）にいるので、買いに行ったりしている。クリスマスにはドイツケーキを持ってきてくれた。ショップには障害者1人、担当者1人の2人がいて、工場には3.4人がパン作りをしている。（以上）

## 7) 成人した里子の「寄る辺」となる里家（1 事例）

里子たちの18歳以降の人生は、正確には把握されていないが、しばしば深刻な様相を示すとも言われている。欧米と比べて自立の遅延している日本の子どもたちの多くは、18才を過ぎても、親に依存して生活している。一般の子どもでも、もし18歳で自立を強いられれば、どれ位の子どもがまっとうに生活していけるだろうか。しかし里子の社会的養護は、原則として18歳で打ち切られる。里親はそれまで作り上げてきた絆のゆえに、中には経済的に援助を続ける場合もあるが、トラブルの多かった里子では限界を迎えている場合も多い。委託されている里子が18歳に近づくにつれ、経済的自立の可能性への不安が、少なからず里親たちの上を覆うようになる。

しかし今回われわれは、いわゆる「18歳問題」には踏み込まないことにした。そのテーマは、いずれ後続の研究者が引き継ぐであろう。しかし「家族」は、経済的自立以外に、多くの人びとの心のよりどころの役割を果たす。経済的な自立より、心の拠り所としての機能のほうが大きいかもしれない。原家族（生まれた家族）が心の寄りどころたり得なかった里子の場合、どこにその心の拠り所を見出せばいいのだろうか。むろん多くの場合は、結婚して作り上げた新しい家族が、その場となるであろうが、それでも、故郷としての「親の家族」の役割は、人の精神的安定のためには重要な役割を担うのではなからうか。

全ての里子が原家族との「家族再統合」を果たせるわけではないとしたら、里家が長く里子を支える「心の寄る辺」となってくれることを、願わずにはいられない。

事例204は、里子と言う船が、帰ることのできる「港」であろうとしている里親の事例である。しかしこの事例ですら、養育した7人の里子のうち、4番目の子どもとは交流が途切れている。われわれとしては、ひたすら4番目の船の航路の安寧を祈るばかりである。

## 204 里子が家を離れても交流を続け、いつでも帰ってこられる「港」でありたいと考える里親 一定年からの社会貢献のスタート

### 1) 概要：

7人の里子を養育した。中で5番目と6番目の里子は、実母が病死した姉妹で、養護施設から引き取り、11年間養育して、病身の父親と将来は一緒に過ごせるように（家族再統合を目指して）、実父とのよき交流を図って来たが、やがてその父親も病死してしまう。

ポイント：里子たちの養育を終えても、いつでも船が帰ってこられる港の役割を果たしたいと交流を続ける里父は、60歳で自分の事業を里子の1人に譲った。

### 2) 家族構成：

里母60代、里父は70代。里父は10年前に、60歳で、父親が起業して引き継いできた自営業を里子の1人に譲り、自分はNPOを立ち上げて、夫婦共に里親サポートや青少年の育成等に携わっている。実子3人（42歳、40歳、39歳）は自立して、遠方に住む。同居中の

里子は現在1人(15歳、中3女子)で、最近までその姉も養育していたが、今は東京で職についている。

### 3) 里親志望の動機：

里母は12歳で父親を亡くし、母親が働きに出たが、昔のことゆえ近所の人たちがよく世話をしてくれたという。もともと子どもが大好きだった。自営の里父と結婚して、ある時「家庭養護促進協会」の新聞記事を見て里父と相談し、自営の傍ら7人の里子を養育してきた。里父も子どもが好きで、長い間経営していた家業(自営業)より、社会貢献ができる今の生き方のほうが自分に合っているとのことである。

### 4) 里子の養育歴と現在：

- 1 番目 (男性) 現在48歳で、高校3年生の時1年間養育した子。その子に10年前、家業を譲った。この(元)里子は卒業後、寮のある企業に就職し、後に転職して自動車関連の企業に入って結婚。子ども連れで、何かと里家に帰って来ていた。父親(元里子)が、数年して現在の会社で将来の展望が開けないと思っていた時期が、里父も自営の後継ぎを考える時期になっており、里親の許に戻るようになった。
- 2 番目 (男性) 小1から11年間養育し、専修学校に1年。現在はパン屋で働いている。
- 3 番目 (男性) 16歳から18歳迄養育。現在はフリーターをしている。
- 4 番目 (男性) 高3から1年間養育。現在は連絡がない。
- 5 番目 Aちゃんの姉 9歳から20歳迄養育し、専門学校卒業後東京で就職。
- 6 番目 Aちゃん 中3で15歳。
- 7 番目 (女性) 高1から大学まで養育。現在は24歳。高校では不登校の時期もあったが、浪人せずに国立大学に入学し、大学院で電子工学を学び、今春大学院修了予定。就職も内定。

## 2) Aちゃんについて：

### ①経過

一時保護所から、児童養護施設に移された姉妹2人を委託される。Aちゃんは妹。2歳から現在まで12年半養育。母が病死した時、姉は小学3年生、Aちゃんは2歳で、父親は病身で姉妹を育てられなかった。その実父も後に病死した。

### ②身体状況：

委託当初は、夜泣き、便秘がひどく、病弱で、アトピーがあり、長く病院通いをした。

2歳時点で離乳が完了してなくて、好き嫌いが激しく、食べられるもののほうが少なかった。おなかを壊しやすく、身長が小さかった。小食で睡眠が浅く、便秘がちだった。

### ③性格：

わりと小心で劣等感が強い。少し人みしりをする。親との分離で不安が高く、育てるのが大変だった。

### ④学校生活：

成績は中位で、苦手は社会。勉強はやや嫌いだが、学校とても好き。宿題は自分からするし、友だち関係もわりといい。

⑤親子関係：

とても気があっている。思ったことは遠慮なく叱る。里母のことはミツちゃん、里父はヤツちゃんと呼ばせてきた。「お父さん」や「パパ」と呼ばせなかったのは、いずれ実父（家族再統合）のもとに帰る時に、さし障ると考えて。

養育返上は1度も考えたことがない。

⑥実父との交流：

小1までは実父が泊まりに来たり、姉妹と一緒に外出したりしていた。学校行事の時にも来てくれた。将来、父親と姉妹が生活できることを目標に、家族再統合に備えて種々配慮をしてきたが、Aちゃんが小2の時に実父も死亡した。

⑦この先は、姉に専門学校を卒業させたように、Aちゃんも大学か専門学校にやるつもりでいる。将来は自分の好きな道に進んでほしいが、今はまだその道は見つかっていないようだ。

(以上)

### 3.事例タイトル一覧（掲載順）

- 201 乳児院にボランティアで通って子育てを勉強した里親  
—実子がいないので子育てをしたかった
- 203 看護教員（小児看護専門）の仕事をもちながら、3人の里子を育ててきた里母  
—娘時代は保育士志望だった
- 104 里子に大学進学の手を渡したいと里親を志向した研究職の里父  
—里子たちの18歳以降の多様な進路
- 103 里親をしていた友人に触発されて自分もと言出した里父  
—里子が大学進学を希望した時に備えて、1歳4カ月から学資保険をかけていた
- 101 ルールの緩やかなファミリーホームを運営できる幸せ  
—健やかな里子たちに恵まれて
- 102 生後3週間で委託された子との心の通い合いは特別  
—早期委託を望む里親たちの声に応えるエビデンスの一例
- 205 「おばちゃんの子に生まれて、やり直していい？」  
—虐待のトラウマから、しばらく「ほか弁」を食べなかった子
- 105 娘時代から福祉に関心があり、タイの子どもに学費援助をしていた里母  
—実子が自立して、夫婦二人になって里親登録
- 106 養子だった母親をもつ里父が希望して里親登録  
—その後実子は大学院で福祉を学ぶ
- 304 若い時にアメリカ滞在経験もあって、里子制度に文化的な偏見のなかった里親  
—種々あったが、今は里子のエリートと言われている子
- 309 子ども時代ヨーロッパにいて、養子が日常的な文化の中にいた里母  
—将来は「家族」として父親と何らかのかかわりを持たせたいと交流させている
- 308 大人に心を開かず、2年経っても里親に敬語を使う里子に気の重い里母の日々  
—トラウマを持つ子には、愛を注ぐだけでなく専門的治療も必要ではないか